

問題編

■大学・短期大学部：一般選抜 2 期

▶試験科目・配点

教科	科目	配点
選択	「コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ」「国語総合（古文・漢文を除く）・現代文B」から1科目選択	100点
選択	「化学基礎」「生物基礎（生物の多様性と生態系からの出題は除く）」から1科目選択	100点

▶備考

- ・受験科目は試験当日に選択。
- ・各科目の得点を科目ごとに偏差値化し、合計した数値を合否判定に使用する。
- ・各科目の得点に、「全体の学習成績の状況」を偏差値化し、合否判定に使用する。なお、「科目試験」と「全体の学習成績の状況」の配点比率は20:1となる。

解答

出典

柴谷篤弘『構造主義生物学』△第一章「構造」への招待・タマゴが先かニワトリが先か 循環▽（東京大学出版会）

問1 (ア)―(b) (イ)―(d) (ウ)―(d) (エ)―(a)

問2 (a)―(a) (b)―(d)

問3 X―(c) Y―(b)

問4 (a)

問5 (a)

問6 (d)

問7 (b)

問8 (c)

問9 (a)

問10 (c)

解説

問3 X、「イネの栽培」と「山林の樹木の芽吹き」との類似性に着目し推測することで、「イネの栽培」に適用されていた「循環」という概念を「山林の樹木の芽吹き」にも「一般化」する。

Y、直前の「実体（モノ）の集合が、……このような状態変化が繰り返される」は、後で「コトの循環あるいは回転」とまとめられる。それを二段落後で「関係性」「構造」と言い換えている。

問4 「つまりは、もともと存在しなかったのと同じ結果になる」は、ここでは〈絶滅してしまう〉と同趣旨である。
《i》の直前「オス・メス一対のニワトリは少なくとも二個以上のタマゴを生まなければ、その持続が保証できない」というのは、結局、絶滅してしまうことを意味している。

問5 傍線部Aにかかる設問がこの順番で出題されていることからわかるように、この設問は傍線部Aの前後を読んでい
るだけでは解けない。解答根拠は第六段落にある。「話をニワトリとタマゴに戻せば、……であつたはずである」で
ある。

問6 「二つの『循環』」とは「実体の循環」と「状態の回復」である。後者について本文では「再現する実体あるい
は『主体』を構成している物質自身は、かならずしも再現に参加しなくてもよい」とある。aは「ある時間間隔で同
様に」、bは「かならず」が不適切。

問7 空欄を含む文に「すなわち」とあるので、空欄の直前の文「これがここでいう状況あるいはコトの『同一性』を決
めるので、それを担う物質やそれにかかわる人たちが列車の同一性を決めるのではない」の言い換えとなっている選
択肢を探せばよい。

問8 本文中で「外見」と「生殖」のかかわりについては述べられていない。よって、正解はcである。なお、第六段落
に「生物の自然発生は、生物が一番最初に発生して以来、二度と起こらなかった」からa・bは内容的に適切であり、
dも、生物は「循環」するものであることから内容的に適切である。

問9 「根元的な存在」「すなわち」「構造」が「目には見えない」のは、「算術の規則が目に見えない」と同様なのであ
る。よって、「どのような点が同様かどうか」という設問に対する解答は、「目には見えない」という点である。
選択肢がわかりづらいが、a「実体を通してのみ認識できる」がそれに該当する。

問10 第七段落前半「このようにして、……つまり増殖する」までの内容に、cが合致している。a・bは第四段落の内
容に反する。dは「一回の」が不適切。「二以上の個体を産む必要がある」にしても、それは「一回の出産や産卵」

である必要はない。

二

出典

青木保『多文化世界』／第一章 文化という課題 1 文化とは対立するものなのか「帝国」の議論と、
文化による差別（岩波新書）

解答

問1 (ア)―b (イ)―c (ウ)―d (エ)―a (オ)―d

問2 (a)―b (b)―d

問3 X―b Y―c

問4 b

問5 a

問6 c

問7 b

問8 c

問9 a

解説

問3 X、次の文の「だが、社会や文化の違い」ということは、ある程度、変えることができます」を参考に「あ
る程度、変えることができます」の対義語を選ぶ。変えられないものだから「絶対的」である。

Y、前段落の趣旨に基づき、「人種的な憎悪と恐怖の主要な表象」が「生物学的な身体的特徴」から「社会や文化の違
い」へ移ったことを押さえる。

問4 「その一方で、文化の違いを論じるのは正当な議論、正当な権利とされている」から考えると、その直前には、(○)
○の違いについての議論は不当とされている」という内容が書かれていると考えられる。《ii》の前には「肌の
色の違いを理由に社会的な問題を論じることは政治的に正しくない」と書かれており、ほぼ合致する。

5 解答 《免 疫》

22—c 23—d 24—d 25—c 26—c

問5 空欄の直後の「文化の違いが人種主義の基本」という表現に着目する。つまり、「文化の違い」があるから「人種主義」がある、というのである。〈文化的区別の厳密性〉に言及するc・dよりaが適切である。

問6 第十段落に「人種差別理論」の基本が「生物学的」なものから「文化」に移行した、とあり、第十一段落では、その「文化」について「一つの文化や伝統と、別のそれとの間が乗り越えられないもの」である、とする。なお、aは「存在論的差異」や「……ことで」といった箇所が不適切。

問7 ここで「帝国」というのは「文明化された」世界全体をじっさいに支配する体制」であるので、「適当でないもの」は、「世界全体の分割を主張する」とあるbである。

問8 最後から二段落目に「小さな違いはいつの間にか大きな価値観の差異にまで発展することもあります」とある。最終段落の「その差が一般のアメリカ社会で、……文化の概念は人種差別理論を強化する面がありうる」にも着目する。a「政治的なタブーとして徹底」、b「無理に」、d「議論の本質が異なる」などが明らかに不適切。

問9 aは第十二段落の内容に合致する。残りの選択肢はいずれも後半が不適切である。